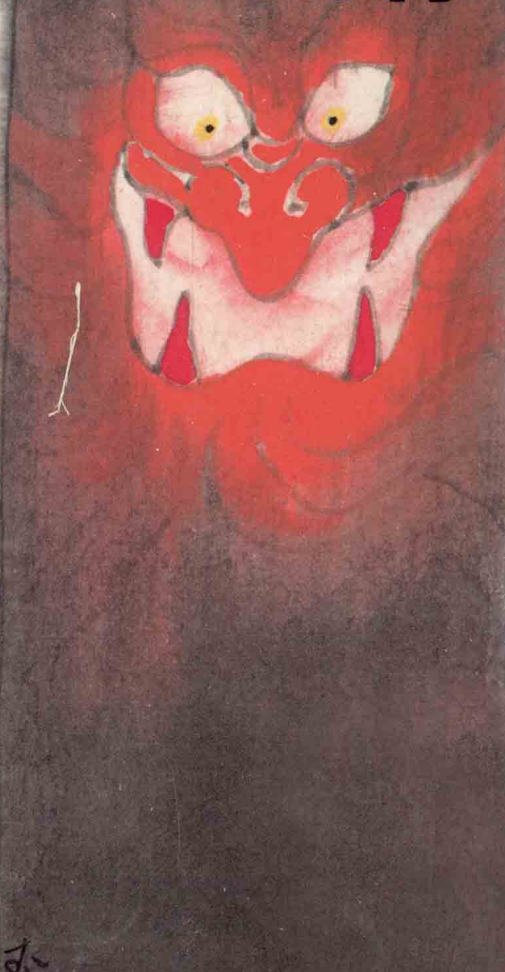


●長編痛快小説

西村寿行

幻
戯
めくらまし



光文社文庫

長編痛快小説

幻（めくらまし）戯

著者 西村 寿行

昭和62年 5 月 20 日 初版 1 刷発行

昭和62年12月15日 2 刷発行

発行者	大	坪	昌	夫
印刷	凸	版	印	刷
製本	光	洋	製	本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112 東京都文京区音羽2-12-13

電話 東京 03 (942) 2241(代表)

振替 東京 6-115347

© Jukō Nishimura 1987

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-70540-5 Printed in Japan

長編痛快小説

幻^(めくらまし)戯

西村寿行



光 文 社

幻戲目次

第一章 玄道 5

第二章 玄道聖人 58

第三章 妖よう狐こ 116

第四章 暗あん転てん 175

第五章 流りゅう氓ぼう 262

第六章 鬼道 325

第七章 百鬼夜行 383

第八章 玄 433

解説 北上次郎 490

第一章 玄道

1

玄^{げん}とは自然の始祖である。

玄とは黒い色であり、ぼんやりとものが暗くみえるほどに深い。

だから「微」と呼ばれる。

だから「妙」と呼ばれる。

玄道。

宮田^{みやた}雷^{らい}四郎^{しろう}は玄道を目指していた。

玄道すなわち仙術である。

仙術は道教の神仙思想から来ている。

極意を極めれば仙人になれる。

仙人には三位がある。

天仙、地仙、尸解^{しかい}仙である。

天仙は、生きたまま虚空に昇れる。

地仙は仙山に遊ぶことができる。

尸解仙はいったんは死ぬがその死骸は衣類のみを残して消え失せる。ともに寿命は無限である。

春。

宮田雷四郎は南アルプスに来ていた。

北荒川岳の長野県側の中腹である。北荒川が流れている。

標高千六百メートル近いところに掘立小舎がある。雷四郎が国有林を勝手に伐り倒して丸太で組んだ小舎だ。

そのあたり、人跡未踏である。

登山道もない。狐狸とて標高が高すぎるから近づかない。

雷四郎は仙人になるかたい決意を固めていた。

雷四郎は独り暴力団で齢は三十九歳になる。

道教ではその道を志す者を道士という。その術を修める者を方術士という。ともに仙人になるための修行である。

雷四郎はボルネオ島に出撃してタコン峠の七聖人に救けられた。奥地に住む裸族・イバン族の小さな老人たちであったが、玄妙摩訶ふしぎの技を駆使して雷四郎一行とともに重装備のマ

レーシア軍隊を撃破した。

そのつぎには雷四郎はネパールで妖僧ラマ僧侶一団と死闘を繰り上げた。額の中央に第三の目を穿つ透視術に長けた妖怪僧だ。

それらをも、雷四郎は退治した。

もつとも、独力ではない。警視庁刑事の白川武秋しらかわたけあきおよび医師の剣持雅晴けんもちまさはると組んでの死闘だった。

タコン峠の七聖人、額に第三の目を持つ妖僧——雷四郎はおそるべき妖異の術をみてきた。

——人間に限界はない。

雷四郎の信念である。

——仙人になってみせる。

断固たる決意であった。

仙人になるには辟穀へきこく、服餌ふくじ、調息ちようそく、導引どういん、房中ぼうちゆうの五術がある。

辟穀とは五穀ごこくを断つことをいう。つまり、火食断ちである。断穀だんこくともいう。腸の中にかすを溜めてはいけない。医術から編み出されたものだ。それが誤って伝えられ、仙人は霞かすみを喰うなどといひ伝えられた。

何も喰わないわけではない。草木を喰う。朮おけら、黄精わうしやう、禹余糧丸いしだんご、甘草かんざう、防風ぼうふう、莧実ひゆのみなどを粉にして団子にしたものを喰う。草根木皮、金属、岩石類をも喰う。それが辟穀、服餌である。調息は呼吸のしかたである。これが非常にむずかしい。

導引は体操。ありとあらゆるものの動きを真似る。方術士はそこから武道を編み出している。

最後の房中。雷四郎にはこれがもつとも難物であった。

淫して洩らさず。精液を放たずに脳に還元するの術だ。『素女経』や『玉房秘訣』には、卑猥な説明がなされている。

雷四郎の精力は世界一。

しかし、ここには房中の術を行なうにも女はいない。

雷四郎は天の一面を睨んでいた。

雷四郎の仙道修行がはじまった。辟穀がその第一だから喰い物はいっさい持ち込んでいない。ウイスキーもタバコも無い。つねにポケット一杯は持ち歩くコンドームも持って来っていない。

死ぬ心配があった。なにをと、雷四郎は意志力で死臭をはね返した。死神なんぞは叩つ殺してやると。もともと雷四郎は粗暴この上ない男であった。

人相が悪い。馬並みに貌が長い。目つきが陰悪だ。痩せていて背が高い。猿臂が長い。独り暴力団だから、これまで賭場荒らしで喰って来た。人相風態骨格にそれらが牡蠣の殻のように頑として表われている。

雷四郎は餌探しからはじめた。

——仙人になる。

目的はそこにある。

だが、いまは中世ではない。道教でいう仙人になどなれるわけではない。それは雷四郎も承知していた。

神仙思想のはじまりは蜃気楼しんきろうからきている。中国の蜃気楼で有名なのは西域砂漠および渤海湾周辺の山々である。折りから戦国時代である。各地に王城があった。蜃気楼となってそこに浮かび上がる王城をみてひとびとは天に仙城があると思ひ込んだ。仙人になればその仙城に昇れると思ひ込んだのが、神仙思想のはじまりである。

そのくらのことは雷四郎も勉強している。

仙人にはなれないが、仙人になるための方術を極めたらタコン峠の七聖人やラマの妖僧なみの術は身につけることができる。

真の目的はそこにあつた。

雷四郎は賭場荒らしで飯を喰つて来たから日本中の暴力団からいのちを狙われている。かといつて、ほかにはなんの能もない。前途に一筋の光明もない。

ボルネオでマレーシア軍を撃破し、ネパール秘境でラマ教の怪妖僧を叩き潰つぶして帰国した仲間、白川武秋は刑事に戻り、剣持雅晴は医師に戻つた。

独り、雷四郎には戻るべきところがない。

思ひついたのが仙道である。

仙人にはなれないが、方術士にはなれる。空を翔かけ、鹿のように大地を駆ける。タコン峠の七聖人のように動物を意のままに使う。方術士はまた居ながらにして鉢はちを飛ばして食くいもを得、

瓶を飛ばして水を得るといふ。

その境地に至る。そして、山を下りる。

玄道場げんどうじょうを設ける。

何万人、何十万人の信者を集める。

自らは玄道聖人げんどうせいじんと名乗る。

数十人の妾をつくる。

信者は女性ばかりに絞る。悩みを解消してやるために仄暗い奥の院で自分の男根に仕えさせる。信仰に救いを求めて来る女はだいたいが性欲不満症のヒステリーと決まっている。莊嚴なる奥の院で玄道聖人の巨大で雄渾ゆうこんきわまりない男根につらぬかれて泣き叫べば、悩みはたちどころに解消する。

目的はそこにあった。

雄大な目的である。

そのためには仙道を修めながら男根を鍛えなければならない。一日に数十人の女信者を泣き叫ばせて病根を断つにはそれなりの男根がなければならぬ。

男根を岩に載せて何時間も小枝で叩く。タワシで出血するまで亀頭を擦る。仕上げが軽石だ。軽石で出血するまで擦る。そのうちには亀の甲羅に負けない頑健そのものの黒々とした亀頭が出来上がる。

男根の巨きさおほそのものには雷四郎は自信がある。

鍛え上げた男根で、ずらりと並べた女信者の真白い尻をつらぬいてゆく。

——悲鳴、堂に満つ。

雷四郎の脳裡にはその光景がある。

女信者たちは玄道聖人の男根に世上の苦を忘れ、懊惱を忘れる。

たちまち、玄道聖人の奴隷となる。

最初に雷四郎は蝮をとらえた。仙道修行に獣肉は外道である。漢方薬の集大成である李時珍の『本草綱目』にあるものが主たる食物である。だが、それでは、雷四郎は死ぬ。

適当に虫類、爬虫類を喰うことにした。

火食は厳禁だから蝮の首を切つて、血を吸った。つぎに皮を剥いだ。そして、肉を貪り喰つた。数時間とたたないうちに猛烈な下痢をした。

道教の倫理には積善がある。神仙思想には儒教の影響があるからだ。

天仙になるためには千二百善を、地仙になるためには三百善を積み重ねなければならない。二百九十善を積んだあとで一悪を犯したらすべてご破算になるとされている。

仙道十戒、老君二十七戒などがある。

殺生はそれらの戒の最初にあげられている。

勝手にさらせと、雷四郎は毒づいた。しかし、下痢には懲りた。以後、生きもののみは火食にすることにした。草根木皮をはじめ、本草綱目にある薬草探しを雷四郎ははじめた。

たちまち、雷四郎の体から肉が殺げ落ちた。陰相がさらにあらわになった。猿臂のみが長い。

その長い腕で木の実や草の根をもぎ取っては口にした。

雷四郎の凹んだ目はたえず右に左に動いている。餌を求めて落ちつきがない。

数日もたつと深山を彷徨う幽鬼と化した。ウイスキーが飲みたい。タバコが喫いたい。体力はないのに、女の性器が、尻が、目の前にまぼろしとなって浮かぶ。足がふらつく。

辟穀どころか断食に似た苦行であった。口がひからびて、唇にひび割れが出た。自分で死相がわかった。これは、あかんぞと、雷四郎は思った。だれにも発見されずに深山の小舎でひたひたに死骸になっている自分を思い描いた。いまのうちなら下山するだけの体力がある。下山せよと脳裡でしきりに命じるものがあつた。

ふらつきながら歩いているとなんの脈絡もなしに目の前に林檎のたわわになった枝が浮かぶ。攪むと、消える。幻覚が雷四郎に取り憑いていた。寝ても覚めても喰い物の幻覚は出る。

しかし、雷四郎は下山はしなかった。

玄道場がある。玄道聖人がある。

三拝九拝して真白い、豊かな尻を並べる、信者群がある。

喰い物の幻覚と妄想が錯綜して雷四郎を踏みとどまらせていた。

山に籠って約十五日間がたった。

どうにか雷四郎は修験道になじみはじめていた。飢えに体が慣れはじめていた。わずかな草根木皮、蘚苔、木の実、菌などで飢えが凌げるようになった。胃がちぢまったのである。拡充することを胃は諦めていた。

喰い物の幻覚はみる。しかし、その幻覚に引きずられることはなくなっていた。幻覚は幻覚だと意識できた。死相の消えたことを雷四郎は知った。

その頃から雷四郎は調息の術に入った。

調息とは呼吸術をいう。腹式呼吸のことで胎息たいそくともいう。行氣の法、吐納とのうの法ともいう。「人能よク自ラ節養シ、其ノ天ノ精氣ヲ受クル所ヲ失ワズ。即チ以テ久シカル可シ」。調息とは長い時間をかけて呼吸する。鼻から息を吸い、胎中に満たす。静止百二十を数えてからかすかに吐き出す。その吐く息は口の前に吊り下げた鳥の胸の羽毛をもそよがせないほど、ゆっくり吐く。

一回の呼吸が千を数えるまでになればかなり上達である。一呼吸で二千回。二千回を数えられるようになる、人間はしだいに若返りはじめる。

『抱朴子ほうぼくし』によると、仙人となった抱朴子の祖の葛仙公は暑いときは池の底に入って一日は出て来なかったとある。

調息の極意はそこまでゆく。

最初は五十ほどしか数えられなかったのが、しだいに数える数がのびた。

喰い物が極度にすくなくカロリーがないからである。五十が七十に、七十が百にと伸びはじめた。しかも調息は深夜から朝にかけて行なう。胃、腸が空になったときがもっとも調息の術が行ないやすいのだった。

雷四郎は急速に仙境に近づきつつあった。

ただし、自身がそう思うだけである。

人跡未踏の深山に籠って二十日余りもたつと、様変わりがした。自分でも自分が雷四郎だとは思われなかった。容貌のみではなく、邪念が薄れつつある。

独り暴力団で死を覚悟して賭場荒らしに殴り込んだことなどがウソのように思える。静謐の気があたりを包んでいる感じがする。

昼前から夕刻までは喰い物を探しに出る。

神草あるいは仙草とされている茸類、菌類、人參、黄精、松脂、白朮、玄參、茯苓、葛根、天門冬、蜀椒などがある。

とくに松脂は仙人には欠かせない喰い物であった。幹や枝などに拳大に塊っている黄色い脂だ。青松葉もまた重要視される。仙人は松葉と松脂のみを喰ったとさえいわれる。焼酎に松葉を漬けた酒は最上とされる。

だが、松葉だけは喉を通らなかった。茯苓は精力剤として修験者に昔から知られている。松の伐った株に出来る幼児の頭大の菌だ。それらを雷四郎は探して深山を分ける。

夕刻には小舎に戻る。夜半まで眠る。夜半から朝まで胎息に入る。いまは鼻で息を吸い込んで二百までは数えられるようになっていた。空気は天の精気である。雷四郎は自身が天地、つまり陰陽合体化しつつあるのをおぼえていた。

——方術士になれる。

その自信が湧きつつある。雷四郎はある日突然に訪れる開眼を待った。

調息がかなりに上達したのは入山して二カ月近くたってからであった。

鼻で息を吸い込んで二百八十まで数えられる。吐き出す際も鳥の胸毛をそよがさずとまではいかないが、あるかなきかに吐けるまでにはなっていた。

調息が上達するにつぎは導引である。

導引とは柔軟体操である。紀元一世紀頃にすでに漢方医学はほとんど完成している。後漢時代だ。〈五禽の法〉というのがある。当時の神医といわれた華佗が創始した。

五禽とは虎、鹿、熊、猿、鳥を指す。それらの四肢、羽の動きなどを採り入れた運動である。〈五禽の法〉はのちに方術に採り入れられて武術に成長している。

虎の猛威、猿の身軽さ、鹿の疾駆、熊の柔軟さ、鳥の軽妙さをすべてわがものとする事ができれば病いは身から去る。それだけではなくて向かう敵はいなくなる。

雷四郎は導引の術にもっとも魅力を感じていた。〈五禽の法〉を会得すれば雷四郎は天下無敵になる。空手、柔道、プロレス何するものぞとなる。

〈五禽の法〉を会得すれば雷四郎は深い谷を飛び、樹から樹を翔けることができる。謡曲、鞍馬天狗にあるように、立つ雲を踏んで飛んでゆくことが可能になる。

雷四郎はそれをはじめた。

栗鼠がいる。頭髮も髭もぼうぼうの雷四郎をふしぎがって眺めに来る。ときに狐が通る。貂が野兎を追う。猿の一群が山越えをすることがある。雷四郎はそれらの身のこなしを見守った。